

# 正木町遺跡

第10次発掘調査報告書

1999

名古屋市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、名古屋市中区に所在する正木町遺跡の第10次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は個人住宅建築に伴う事前調査である。
- 3 調査地点の地番は中区正木二丁目1102である。
- 4 調査面積は約85㎡、調査期間は平成10年8月3日～同年8月25日である。
- 5 本調査の調整事務は名古屋市教育委員会文化財保護室学芸員・小島一夫が、発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員・野澤則幸、田原和美が担当した。
- 6 本書では、基準高は東京湾平均海面を(T.P.)、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を使用している。
- 7 発掘調査および資料の整理に際し、以下の諸氏に御教示・御協力いただいた。記して謝意を表す。  
水野裕之、伊藤正人、浅野弘子、小浦美生、近藤和子、川原則子、加藤靖雄（順不同・敬称略）
- 8 調査記録・出土遺物等は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
- 9 本書の執筆、編集は田原が行った。

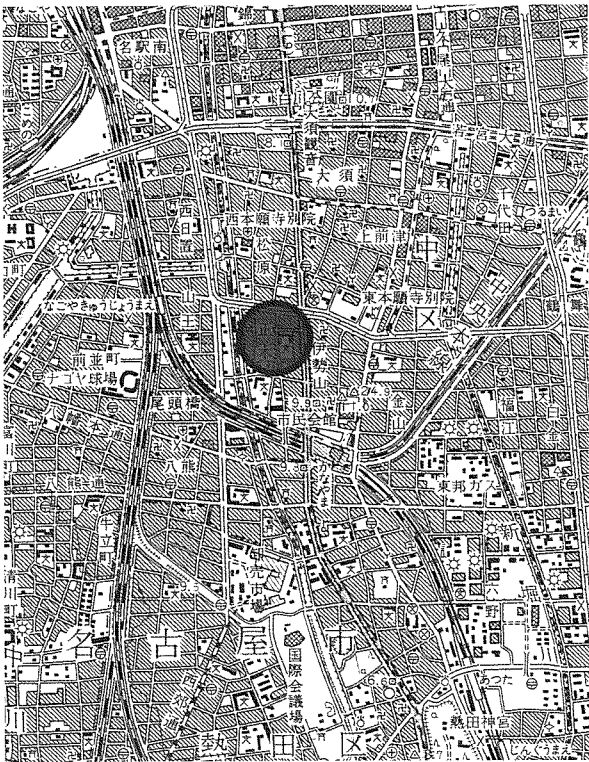


図1 正木町遺跡の位置（名古屋南部 1:50000）

## I 遺跡の概要

正木町遺跡は、現在の名古屋市中区正木一・二丁目および古渡町の一部にかけて所在する。その範囲は東西約330m、南北約300mにわたると推定されている。遺跡は、名古屋市域の中心部の洪積台地（名古屋台地）の西縁に位置している。

1951（昭和26）年北村斌夫氏の調査を嚆矢として、1952（昭和27）年と1995（平成7）年には南山大学により、1969（昭和44）年には伊藤禎樹氏により調査が行われている。名古屋市教育委員会による調査は、1982（昭和57）年に実施した試掘調査を始めに、これまで9次にわたって実施されている。

遺物は、縄文時代から現代に至るまで幅広く出土しており、内容も豊富である。滑石製模造品や初期須恵器、「黒見田」の文字が刻まれた須恵器、陶馬などの陶製品といった、名古屋市域では稀な遺物も出土している。遺構は、市教委第5次調査（1995）で検出した弥生中期後半の溝状遺構が今までのところ最も古い遺構である。この他、古墳時代～奈良・平安時代の住居址や井戸状遺構、中世の井戸状遺構・掘建柱建物・溝などが見つかっている。また古代の巨大な掘建柱建物も3～4軒確認されている\*1。遺物・遺構ともに古墳時代～奈良・平安時代に集中しており、遺跡の中心時期と言えよう。

周辺には時代的にも性格的にも、正木町遺跡に関連する遺跡が接している（図2）。これらの遺跡の関係は、付近の古墳～奈良・平安時代の集落像を考える上で注目されている。また、中世には多くの城館が営まれた場所にあたり、該期の土地利用などを知るには欠かせない遺跡である。

『正木町遺跡 第10次発掘調査報告書』の訂正

1999年3月25日刊行の上記報告書に誤りがありましたので、おわびして訂正いたします。

P.5の図4を、下図に差し替えてください。お手数をかけますが、よろしくお願い致します。

名古屋市見晴台考古資料館

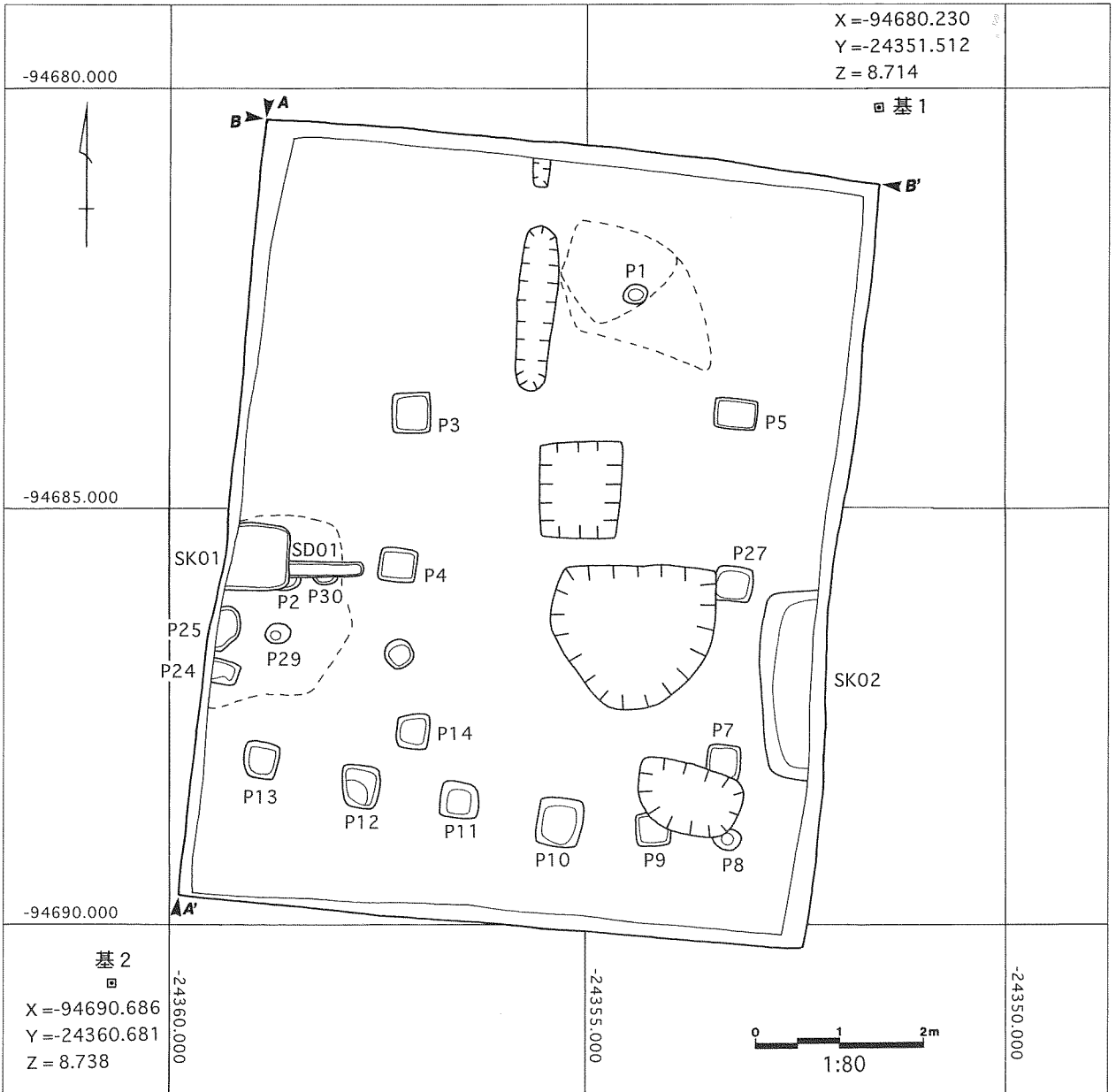


図4 遺構平面図

# 正木町遺跡第10次発掘調査報告書

## 訂正のお願い

本書5ページの図4に、誤りがありました。座標数値の表記位置が逆転しています。正しくは下図のとおりになります。

訂正のほどよろしくお願い申し上げます。

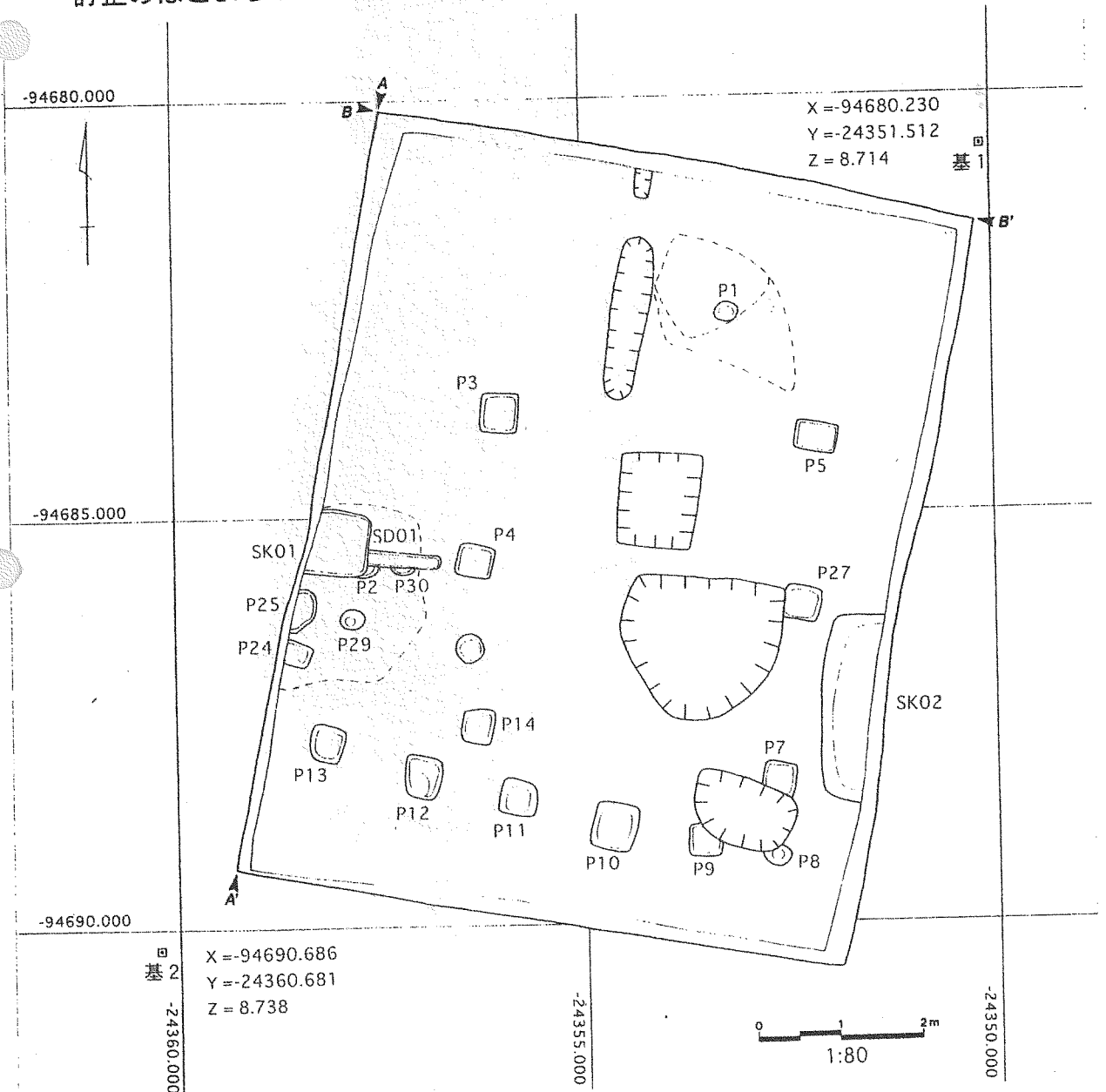


図4 遺構平面図



## II 調査の概要

### 1. 調査の経過

第10次調査は個人住宅建築に伴い実施した事前調査である。調査地点は闇森八幡社の北約100m、台地西縁端から約150m東に位置する。また、第7次調査地点からは約50m北、第8次調査地点からは約20m北東になる。調査対象面積は約85㎡、調査期間は平成10年8月3日～平成10年8月25日である。

調査地は、北側で公道に面し残り三方を住宅に囲まれた、南北に長い土地である。今回は住宅建築範囲のみを対象とした。排土を積み置く関係で南北で二分し、前半に北半区を、後半に南半区を調査した。

8月3日北半区表土除去、4日包含層掘削に入り、基本土層を観察。5日並行して遺構検出を始めるが残存状況は悪い。基本土層図作成。6日遺構仕上掘削、北半区写真撮影。7日雨天のため作業中止。10日平板測量、北半区終了。11日に北半区埋戻し。数日間作業が中断。17日に再開、南半区表土除去。18日包含層掘削。19日～20日遺構検

出および仕上掘削。21日基本土層図作成、平板測量および写真撮影。24日南半区埋戻し。25日にはすべての後片付けを終え、現地調査を終了した。

### 2. 基本土層

水平堆積であることや残存状況などから判断して、調査区北壁面・西壁面で基本土層を観察した。

土層は大きく4層に分かれる(図3)。

第1層は表土層である。第2層は灰褐色砂質土、均質で江戸時代後期に相当する遺物が出土している。第3層は固く締った暗褐色土、中世までの遺物を均質に含む包含層である。第4層は基盤層(地山)である。本来この付近の地山は熱田層と呼ばれる橙黄色粘質土だが、調査区の大半は、この下位層にあたる灰黄緑色砂質土が露出し、橙黄色粘質土は一部に残存している程度だった。残存部分と黄灰色砂質土面のレベル差は約30cmである。地山面には細かな凹凸がみられた。

この堆積状況は、第7次調査地点や第8次調査地点とほぼ同様である。

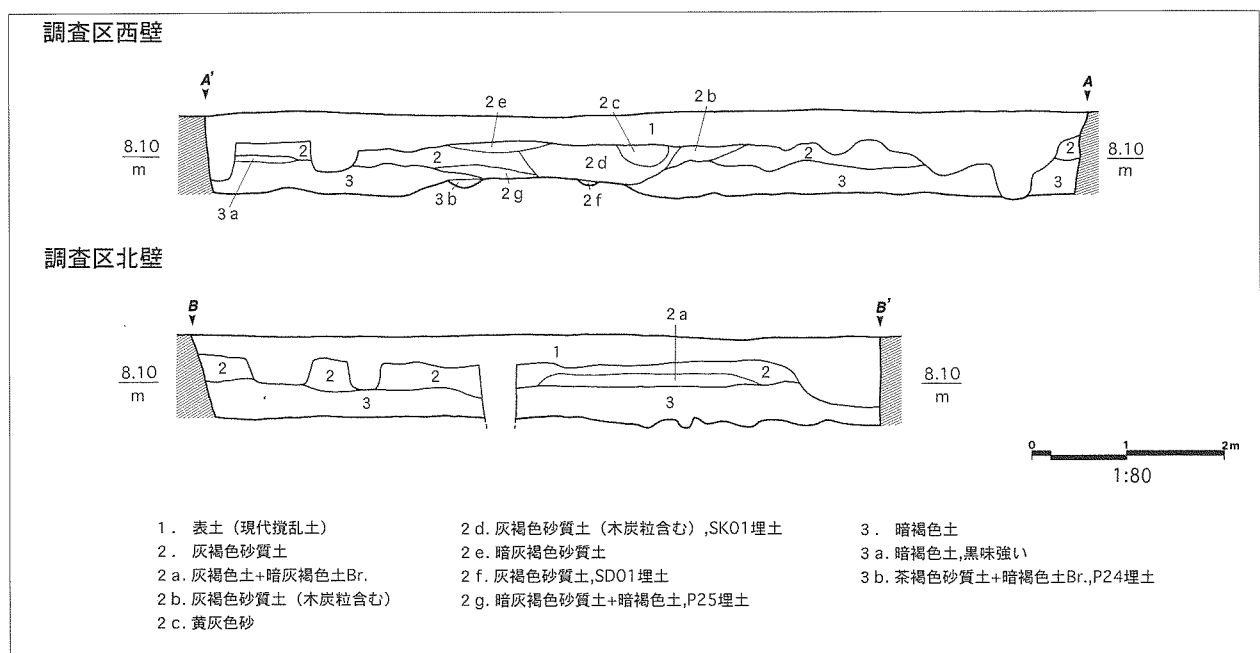


図3 基本土層図

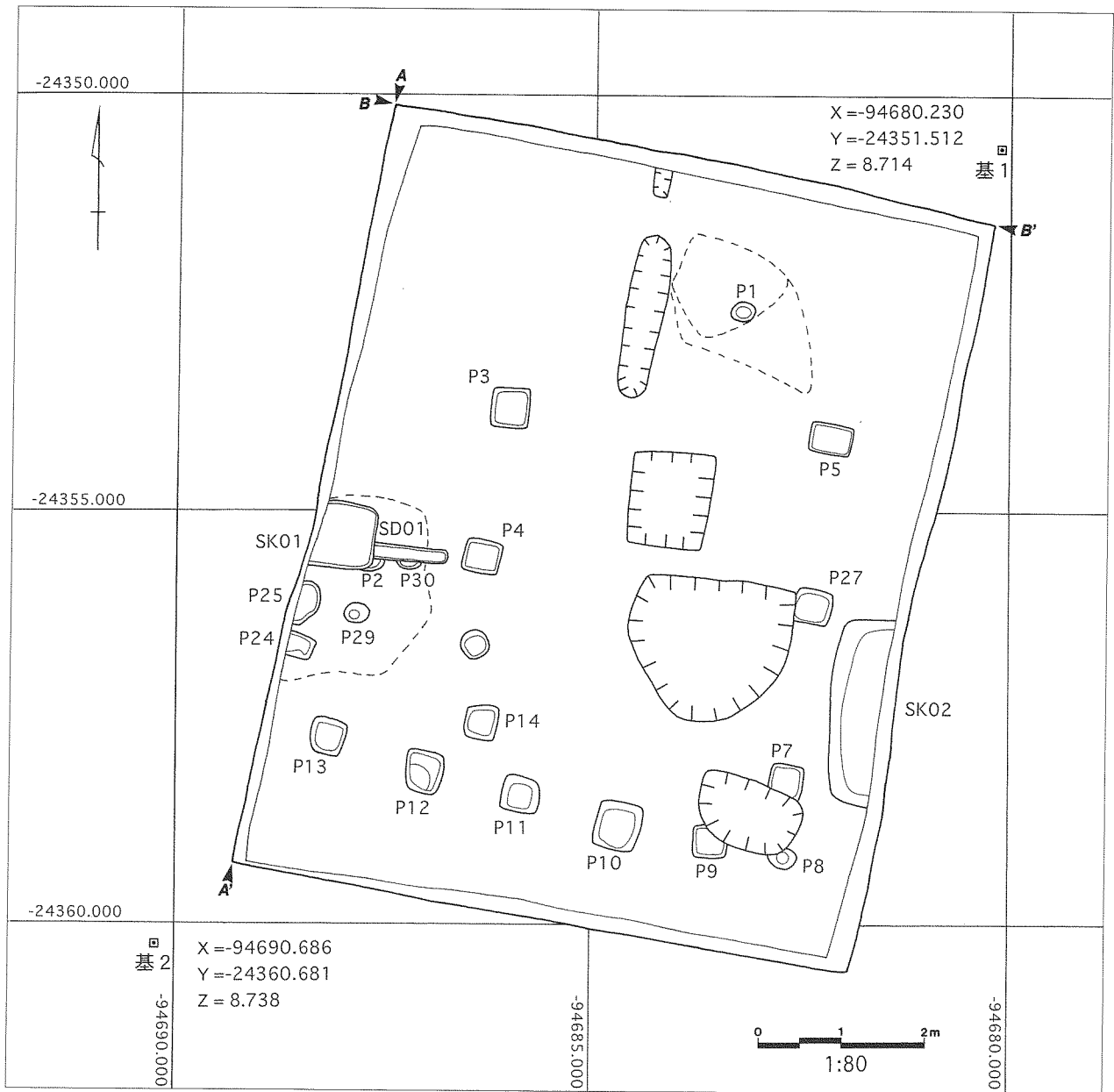


図4 遺構平面図



写真1 北半区全景 (南から)

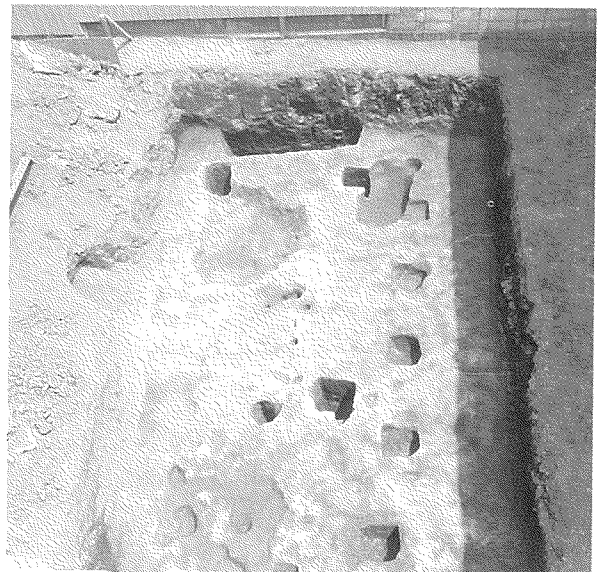


写真2 南半区全景 (西から)

### 3. 遺構・遺物

今回の調査では、土坑（SK）2基・溝状遺構（SD）1条・小穴（Pit）19基<sup>\*2</sup>を検出した（表1）。出土遺物や埋土などから、多くの遺構は近代以降に相当すると思われる。SK01やSD01はやや古いが近世後半のものである。中世以前に帰属する可能性がある遺構は、地山上位層である橙黄色粘質土がたかまり状に残存している部分で検出した、小穴4基くらいである。基盤層が削平を受けているので、その際に中世以前の遺構は失われたと考えられる。

出土遺物はコンテナケースにして2箱程度、多くは第3層（包含層）出土の小破片資料である。

#### SK01

調査区西端で検出した。方形を呈し、一部調査区外に続く。基本土層の第2層を切り、SD01も切っている。暗灰褐色土に地山ブロックが混じる埋土で、炭化物を多く含む。

遺物は近世陶磁器が出土している（図5・表2）。

1は肥前系磁器の染付皿、底部中心にピン痕が1点ある。2も磁器染付鉢、六角形か八角形の多角鉢と思われる。焼継痕が4筋確認できる。3は瀬戸美濃窯産の端反碗、麦藁手である。4～6は瀬戸美濃窯産灰釉灯明皿で、いずれも貫入が多く入り外面体部下半から底部は釉をかき取っている。5・6はセットか、重なった状態で出土した。

磁器はやや古手だが、陶器は19世紀前半に比定される資料である。

#### 小穴（ピット）

埋土によって4グループに分かれる（表1）。黄灰褐色土のグループはP7の遺物から近代の遺構、黒灰色土のグループはSK02と同時期（戦後）と考えられる。

遺物が出土しているピットは少ない。P1から時期不明の土器片が1点、P7から徳利（図5-7）が出土した程度である。

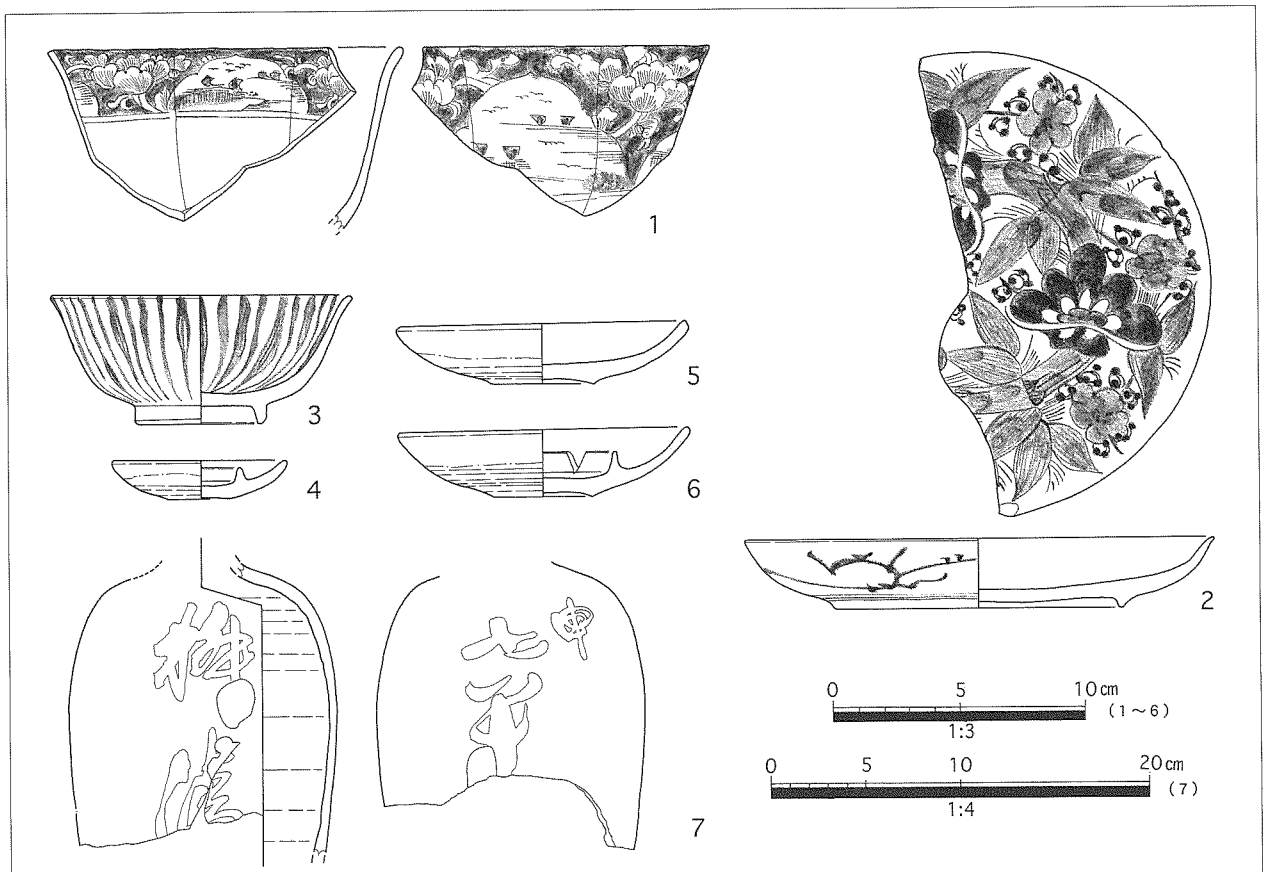


図5 遺構出土遺物（1～6：SK01，7：P7）



## 包含層

今回の調査では、基本土層の第2層が江戸時代後期の、第3層が中世の包含層に概ね相当する。

ここでは出土遺物を中心に記述する。

### 基本土層第2層

約20cm程の堆積を見せるが、混入物などにより若干の細分が可能であった。(図3)

瀬戸美濃窯産の馬の目皿の一部(図6)や陶器片、燻し瓦片などが出土している。時期的には18世紀後半～19世紀に相当すると思われるが、基本土層図をみると第2層はSK01に切られており、SK01の帰属時期を降ることはないと考えられる。

遺物の出土量は、第3層に比べ、ごく僅かである。

### 基本土層第3層

約40cm程堆積しているが、非常に均質である。層の上下に遺物の時間差は関係なく、遺物の集中する箇所もない。中世までの遺物が満遍なく含まれている状況であった。

遺物の大半は小破片資料で、約480点ほどを数える。器種・器形が判別できる状態のものは少なく、大まかな分類しかできない。土師器と須恵器を中心に、灰釉陶器・山茶碗・中世陶器・石錘・小形土錘・古代瓦などが出土している(図7・表2)。土師質の破片に弥生土器と明言できるものはないこと、灰釉陶器片は他種に比べ極端に少数であることが特徴的である。

1は灰釉陶器の甕である。2～3は須恵器、2は土師器写しの高杯脚部で、初期須恵器である。4～6は土師器、一様に表面の摩耗が著しい。7～9・14は中世遺物である。7は山茶碗、藤澤編年<sup>\*3</sup>6型式に相当、8は小皿で同編年7型式に相当すると思われる。9は古瀬戸卸皿などの底面部分で、無釉である。14は常滑窯産陶器の破片で、押印文がみられる。10は古代の瓦、外面はナデを施し、内面に布目痕が残る。側面の面取りは直線

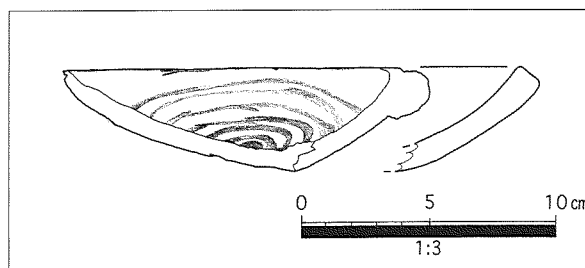


図6 第2層出土遺物

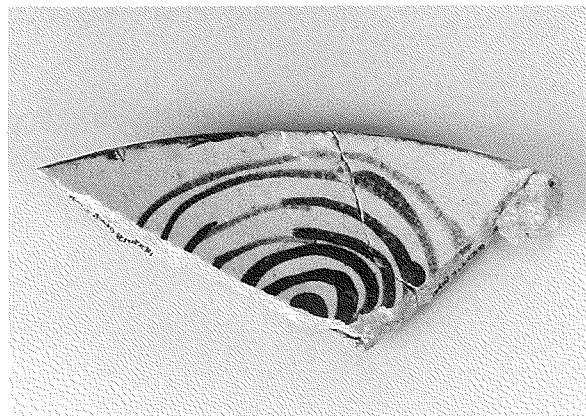


写真3 第2層出土遺物

的で、やや古い要素を持っている。15は石錘。16・17はこぶりの土錘である。

また、正木町遺跡では従来から初期須恵器の存在が指摘されている。先の2をはじめ、縄のタタキ目や櫛描波状文を持つ破片など、今回の調査でも僅かではあるが出土している(11～13)。

第3層は中世以降に堆積した土層と考えられる。しかし、このように古墳時代～奈良・平安時代の遺物が多く見られることから、本来この地点に、当該期の包含層が良好に残存していたことが想像される。

山茶碗を見ると、藤澤編年6～8型式(13世紀後半～14世紀前半)に属する資料が多いが、古瀬戸・常滑に時期が判断できる資料が少ないため、この土層の堆積時期を明言するのは難しい。だが、鉄釉が施されている古瀬戸小破片があり、古瀬戸中期(14世紀)以降であることは確かである。

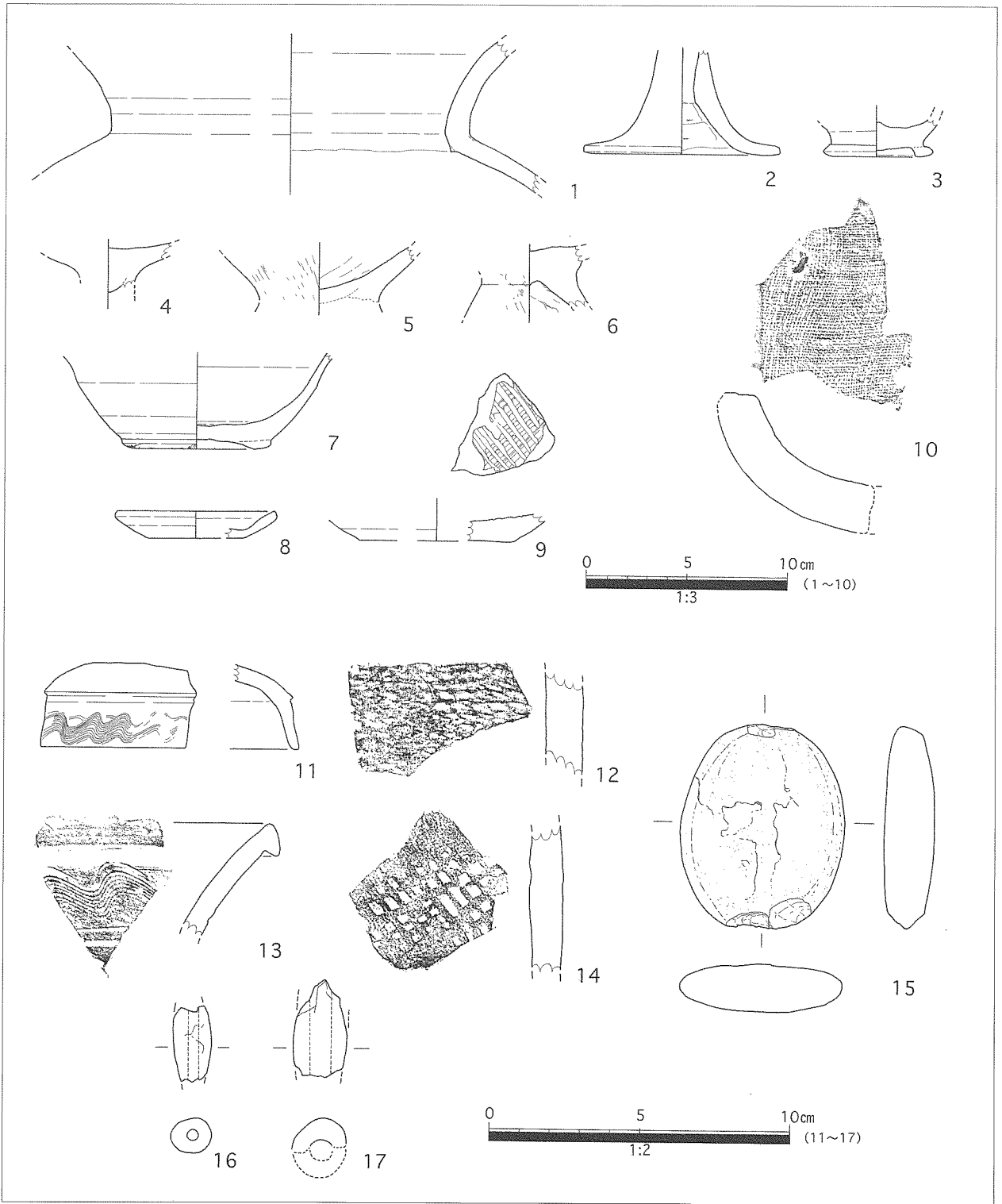


图7 第3層出土遺物

### Ⅲ 小 結

今回の調査地点では、熱田層の上層である橙黄色粘質土が一部を除いて失われており、下層である砂層が中世遺物を含む厚く堆積した包含層に覆われている状況が、調査区全面で確認された。これは、近世を遡る明瞭な遺構が存在しないことから、本来存在した中世以前の文化層もろとも削平を受けた結果だと考えられる。

この状況は、昨年近隣で実施された第7次調査・第8次調査の結果と同様である。しかし、個々に比較すると微妙に異なる点が見られる。

例えば、第7次調査地点では熱田層上層は完全にとんでおり基盤面は平らであったが、第8次調査では削平を受けフラットになった基盤面に人為的に土盛をして溝を成している。今回の第10次調査では島状に熱田層上面が残存する部分があり、意図的かどうかははっきりしないものの、ぞんざいな削平の結果とは思えない。この、基盤層に達するほどの大々的な削平を受けているという共通項がありながら、三者三様の在り方を示している点は興味深い。

またこれまでに、この様な状況が観察できた調査地点は、閻森八幡社の北側部分に多い。調査区全面に削平の痕跡が認められる第7次・第8次・

第10次各調査、調査区の一部が基盤層まで削平を受けていた第4次調査・南山大学調査地点\*4など(図2参照)南北方向の道二本に挟まれた部分に集中しており、遺跡の東側や西側では中世以前の遺構遺物・包含層が残存している。未調査部分が多いため推論になるが、削平範囲は遺跡推定範囲の中央付近～南部分に限られてくる可能性がある。

加えて削平の目的や時期といった点も未だ不明である。削平時期について、市教委調査では基盤層を覆う土層などから中世後半～近世初頭と考えられる結果を得ているが、南山大学調査では近世以降と認識してしており、両者の間に若干のズレがある。また削平の目的については、大まかに土地整備工事が行われた結果と考えられているものの、具体的な原因については可能性を挙げるに留まっている。

正木町遺跡の全体像を復元するにも、上記の点を検討することは重要である。しかし、残念ながら現状ではデータ不足である。市街地のため小規模発掘調査にならざるを得ないからだが、周辺での調査事例が増加すれば、これらの疑問点を解く材料も集まってくるだろう。そして解明に向けて一層の努力が必要なのは、言及するまでもないことである。

#### 註

- 1) 名古屋市教育委員会 1996 『正木町遺跡—第5次調査の概要』参照。
- 2) 遺構検出時は32基を数えたが、掘削の結果基盤面凹部分と判明したものは、削除・欠番とした。
- 3) 藤澤良祐 1997 「中世瀬戸窯の動態」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯などによる。
- 4) 1995年調査地点。市教委第4次調査地点の北隣にあたる。

#### 参考文献

- 南山大学大学院考古学研究室 1997 『正木町遺跡発掘調査報告書』南山大学大学院考古学研究報告第7冊  
名古屋市教育委員会 1998 『埋蔵文化財調査報告29 正木町遺跡(第7次～第9次)』名古屋市文化財調査報告38

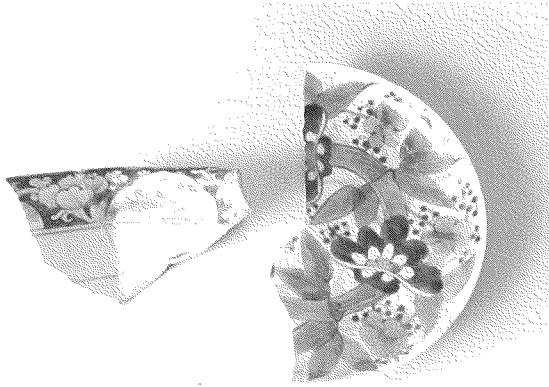


写真4 SK01出土遺物（磁器）



写真5 SK01出土遺物（陶器）



写真6 P7出土遺物

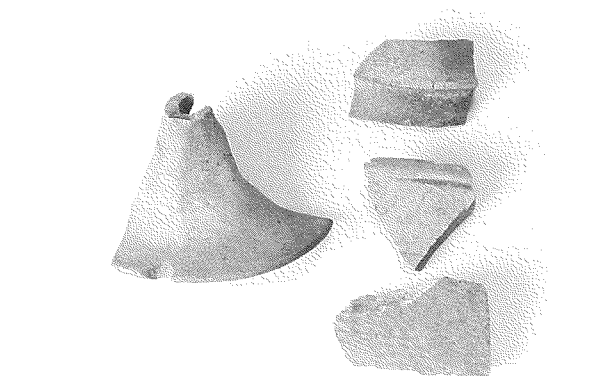


写真7 第3層出土遺物（初期須恵器）

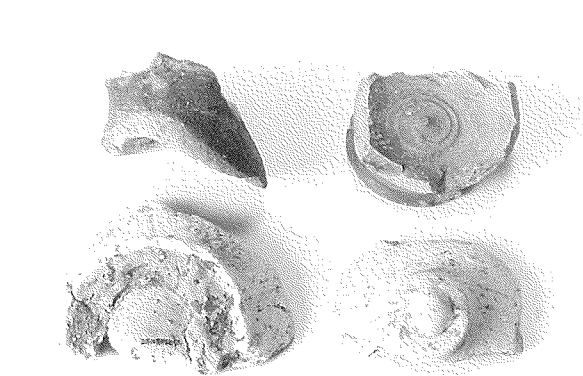


写真8 第3層出土遺物（須恵器・土師器）

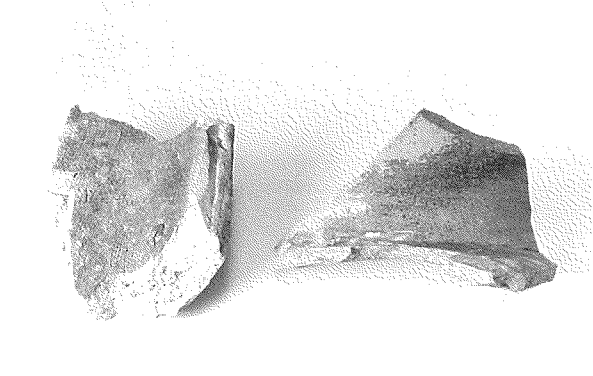


写真9 第3層出土遺物（古代）

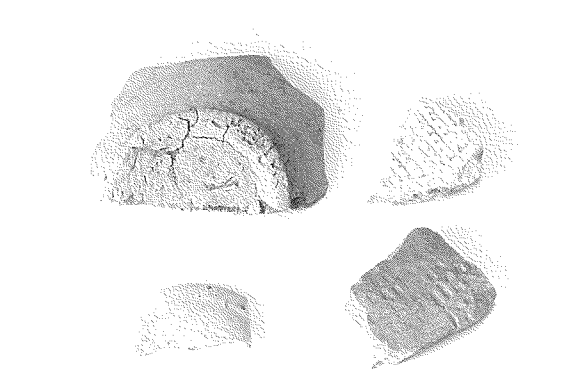


写真10 第3層出土遺物（中世）

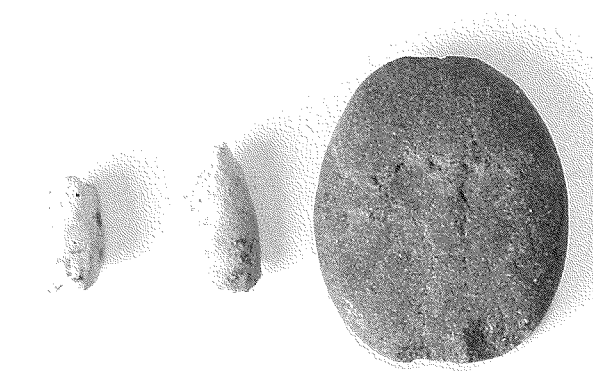


写真11 第3層出土遺物（土錘・石錘）

遺構名	形状	寸法	深さ	埋土	備考
SD01	溝状	20×(160)	9.4	暗灰褐色粘質土	
SK01	方形	(80)×(70)	40.1	暗灰褐色粘質土+黄褐色Br	炭化物含む、近世陶磁器出土
SK02	方形	(220)×(60)	84.4	黒灰土+褐色Br	炭化物多量、防空壕?
P01	円形	直径(30)	8.6	暗褐色土+橙黄色Br	土器小破片1点出土
P02	円形	直径(35)	11.4	暗褐色土+橙黄色Br	SD01に切られる
P03	方形	45×45	85.4	黄灰褐色砂質土	
P04	方形	40×42	73.6	黄灰褐色砂質土	
P05	方形	37×50	73.2	黄灰褐色砂質土	
P07	方形	40×40	70.1	黄灰褐色砂質土	徳利出土
P08	円形	直径(30)	20.8	黒灰色土+暗灰褐色土	
P09	方形	40×35	17.3	暗灰褐色土	
P10	方形	53×50	26.7	暗灰褐色土	
P11	方形	40×40	27.9	暗灰褐色土	近現代
P12	方形	50×46	28.7	暗灰褐色土	近現代
P13	方形	40×39	39.5	暗灰褐色土	近現代
P14	方形	44×34	78	黄灰褐色砂質土	
P24	方形	(30)×(30)	20.3	赤茶褐色砂質土+暗褐色粘質土Br	
P25	方形	(54)×(28)	18.5	赤茶褐色砂質土+暗褐色粘質土Br	
P26	方形	43×47	72.8	黄灰褐色砂質土	
P27	円形	直径(38)	43.1	暗褐色+茶褐色粘質土	
P29	円形	直径(35)	16.1	赤茶褐色砂質土	
P30	円形	直径(30)	7.1	暗褐色+茶褐色粘質土	SD01に切られる

表1 遺構表

(寸法・深の単位はcm)

図番号	出土場所	種別	器種	外面	内面	備考
5-1	SK01	肥前系	多角鉢	染付	染付	焼継痕が数条ある、六角形?
5-2	SK01	肥前系	皿	染付唐草文、ピン支え	染付草花文	18世紀後半?
5-3	SK01	瀬戸美濃	端反碗	麦藁手	麦藁手	19世紀後半、藤澤編年第11小期
5-4	SK01	瀬戸美濃	灯明皿	灰釉、体部下半露胎で回転ヘラ削り	灰釉	19世紀後半、藤澤編年第11小期
5-5	SK01	瀬戸美濃	灯明皿	灰釉、体部下半露胎で回転ヘラ削り	灰釉	19世紀後半、藤澤編年第11小期
5-6	SK01	瀬戸美濃	灯明皿	灰釉、体部下半露胎で回転ヘラ削り	灰釉、棧部切口V字形	19世紀後半、藤澤編年第11小期
5-7	P.7	瀬戸美濃	徳利	灰釉、鉄絵文字	灰釉	19世紀後半
6	第2層	瀬戸美濃	皿	灰釉、口鏽	鉄絵馬目文様	
7-1	第3層	灰釉陶器	甕	灰釉	灰釉	
7-2	第3層	須恵器	高杯	ナデ	横ヘラ削り	初期須恵器、土師器写し
7-3	第3層	須恵器	長頸壺	ナデ、底面ヘラ削り、付高台	回転ナデ	
7-4	第3層	土師器	高杯	ナデ	(摩滅)	
7-5	第3層	土師器	台付甕	ハケメ	板ナデ?(摩滅)	
7-6	第3層	土師器	台付甕	(摩滅)	板ナデ、粘土ナデ付け	
7-7	第3層	山茶碗	山茶碗	回転ナデ、付高台に初殻痕	回転ナデ	13世紀前半、藤澤編年尾張型6型式
7-8	第3層	山茶碗	小皿	回転ナデ、底部回転糸切り痕	回転ナデ	13世紀中葉、藤澤編年尾張型7型式
7-9	第3層	古瀬戸	卸皿	無釉、回転ナデ、底部回転糸切り痕	無釉、おろし目	
7-10	第3層	瓦	平瓦か	ナデ、側面は直線的なヘラ削り	布目痕	古代
7-11	第3層	須恵器	杯蓋	波状文	回転ナデ	初期須恵器
7-12	第3層	須恵器	不明	縄目タタキ	ナデ	初期須恵器
7-13	第3層	須恵器	甕	波状文、沈線	ナデ	初期須恵器
7-14	第3層	常滑	甕	押印文		中世
7-15	第3層	石製品	石錘			現存(88.5)g
7-16	第3層	土製品	土錘	ナデ		現存(3.7)g
7-17	第3層	土製品	土錘	ナデ		現存(4.8)g

表2 遺物観察表

## 報告書抄録

ふりがな	まさきちょういせき だい10じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	正木町遺跡 第10次発掘調査報告書							
編著者名	田原和美							
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館							
所在地	〒457-0026 愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL 052-823-3200 FAX 052-823-3223							
発行年月日	西暦 1999年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		m <sup>2</sup>	
まさきちょういせき 正木町遺跡	あいちけん なごやし 愛知県名古屋市 なかくまさき にちうめ 中区正木二丁目 1102	23100	7-19	35° 08′ 50″	136° 53′ 54″	98.8.3~ 98.8.25	85	個人住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
正木町遺跡	散布地	古墳～古代 中近世	包含層 土坑など	土師器 須恵器 陶磁器		第10次調査		

## 正木町遺跡

第10次発掘調査報告書

1999年3月25日

編集 名古屋市見晴台考古資料館

発行 名古屋市教育委員会

印刷 株式会社 名古屋大気堂